
ビー玉

冬桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビー玉

【コード】

N3246L

【作者名】

冬桜

【あらすじ】

拾ったのはビー玉。でも、もう少し何か拾ったかも。

コップの表面を水が伝う。

ゆっくりとしかし確実に下へと落ちていく。

元は水分だった水は、周囲の水分を吸収して水滴となる。

僕は中に入った琥珀色の液体を喉に流し込もうとコップを手を取った。

手から伝わる冷たい感触をしばし楽しむ。

やがて、意を決したように全て飲み干す。

トン

軽い音とともにコップをテーブルに戻し、席を立った。

季節は年度の始めである春。春の夜の空気は少し肌寒い。もう少し着込むべきだったと思いつながら、あてもなくただ彷徨う。

街灯のオレンジ色の光を浴びる桜は、秋の風景のように見える。季節通りに咲く花の季節外れの姿。少し騒がしい音が風につて聞こえてくる。たぶん、花見でもやっているのだろう陽気な笑い声は今の自分の気分とは釣り合わない。

音から少しでも遠ざかるため、人気のない道を選んでいく。まだ、夜の10時だというのに車の音もしない。考えることも何もなく歩いた。

やっこのことで、意識を表面上まで持ってきた頃には、あたりに街頭はほとんどなく、静かだった。

心では望んでいたつもりだったが、実際に人の気配が全くないというのは、薄気味悪い。

自分は人の世界から隔離されたような孤独感が付きまとう。ふと気付けばそこに人が立っていそう、実際にはそんなこともなく、ただ怯える。

小心者の性か定めか、一度怖くなってしまった以上は、まともに周

困を見回す余裕すらなくしてしまった。

先ほどから足元しかみていない。無論、まっすぐ歩ける程度ではあるが。

一定の規則でアスファルトを靴底が叩く。

そんな調子ですつと下を見ていたから目に入った。

黒い地面にポツンと落ちている物。中に何の色も宿していない透明なビー玉。普段なら気にすることもなく踏み越えるだろうが、今は普段とは違う。

小さなビー玉の前で立ち止まり、それを手に取る。

本当に透明だった。中に多少は混じるはずの気泡もなく。

眺めていると幼い頃を思い出す。単純に遊んでいたころの、複雑な日常を。

今は複雑に考えながら、単純に生きてるように思う。

既に型にはめてしまったから、それ以上変形しようがなくなっってしまったのだと思う。

幼い頃に考えていたことは、今の自分には分からない。でも、今よりはましな生き方をしていた。

固い思想にとらわれず、思うがままに自分を表現し周りとは衝突し、周りとは共鳴していた。

懐かしい感覚が心を満たす。久しぶりの感覚は本当に心地が良い。

しばらく、自分の幼少の頃に思いを馳せていると、目の前に誰がいることに気付いた。

何故か知らないが驚きはしなかった。

ビー玉から目の前にいる誰かへと視線を移す。

暗いためはつきりとは分からないが、小学校高学年ぐらいの子だろうか。

まっすぐとこっちを見ている。正確にはビー玉を見つめているように見える。

「これ、君の？」

問いかけにその子は少しだけ頷いた。あまりにも微小な動きだった

けど、ゆれた長い髪で分かった。

「はい、どうぞ」

ビー玉を差し出す。取るか取らまいか悩んでいるのだろうか。時間が止まったように思う。

この世界で動いているのは、自分だけだろう。比喻ではなく。やがて、おずおずとした様相でビー玉に手を伸ばした。その手にビー玉を置いてあげる。

少しだけ、表情が柔らかくなった気がした。

「ありがとう」

そう聞こえた。小さな声だったけど。

「どういたしまして」

そう言って微笑みかえす。

その瞬間、ぱっと街灯が揺らいだ。

非常に短いその一瞬のうちにその子は姿を消した。

文字通り、消えた。

けれど、ビー玉は手元になく、先ほどの懐かしい感覚も心の中に残っている。

啞然とはこの事だろう。

ただ、帰り道は怖くも暗くもなかった。

明日から、もう少し頑張ってみよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3246/>

ビー玉

2011年1月18日23時03分発行